

するし、えんぴつでなく筆で書くということです。本当にたいへんだと思いました。

学校も、きまった建物がなく、寺小屋から始め、平屋だてから二階だてになってはきたが、とても今の校舎のようなりっぱなものではなかったようです。玉川一小も小高小のころは、あまりよい建物ではありませんでした。

こうして、学校のうつりかわりを考えてみると、今のわたしたちは、鉄筋コンクリート三階だてのきれいな校舎に入り、明るい教室で学習できるのですから、どれだけしあわせかことばでいうことができません。

それに、むかしは、体育館もなかったのですから、雨の日の体育はたいへんだったでしょう。

人間は、年をとると、おじいさん、おばあさんになってしまうのに、わたしたちの玉川一小は、100 さいになって、かえって若く新しい校舎になってしまったのです。

わたしは、このりっぱな校舎で、いつまでも、いつまでも学習したいと思います。

(玉川一小創立百周年記念誌「あゆみ」(昭和48年度発行)より)